



Title	私とSPSS Ver.4（こんな風に使っています）：新しくできたロジスチック・レクレーション
Author(s)	伊海，公子
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース．1993，90，p. 35-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66032
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

私とSPSS Ver. 4（こんな風に使っています）

ー新しくできたロジスチック・レグレッションー

大阪樟蔭女子大学

研究室員 伊海公子

今年から、SPSSはversion upして、プログラムの一部に変更があり、プログラム音痴の私には、「少し頭が痛い」事態になってしまいました。でも、新しく増えた統計プログラムのお蔭で、今まで出来なかったことが出来るようになり、大変助かっています。

と言いますのも、私は研究テーマとして、「食生活」のことを扱っています。今は「食べ物の情報と食生活」についてのアンケート調査を行い、得たデータをSPSSの多変量解析を使って分析しています。研究目的は、いかに分かりやすく食生活の改善点を指摘し、これからどのようにすればその改善点を少なくしていけるかという大きな問題に取り組んでいます（つもり――、本当はもがいています）。

実は、このレポートは、食生活の実態を大型計算機を使っていらっしゃる方々（わたくしのようなプログラム音痴には到底理解できないような難しい研究をなさっているすばらしい方々）に、私の調査結果を知ること、食生活に関心をお持ちいただき、少しでも健康な身体で、お過ごし下さればと思い、よい例かどうかは分かりませんが、書くことを決心いたしました。（特に、男子学生さんと成人男子の先生方に）

では、アンケート調査の結果の一部を使って、ロジスチック・レグレッションをどのように使ったかを説明いたします。

まず、アンケート調査内容について、

1. 調査対象は、関西在住の15歳以上の男女（1,386名）
2. 食生活に関する情報源を8種類の中から、複数回答をしていただきました。

（新聞、専門の本や雑誌、一般雑誌類、テレビやラジオ、広告やチラシ、市場やマーケット、講習会や勉強会、その他）

3. 食生活に関する項目の内、次の7項目を分析に用いました。

*お料理を自分で行うかどうか

*お料理が好きかどうか

*薄味を心掛けているかどうか

*食べ物や栄養への興味の程度

- *食べ物や栄養への自己知識評価
- *過去一週間の栄養・料理の本の読書の有無
- *専門教育・講習会への参加意識

次に、変数の指定について

「料理を自分で行いますか（YES、NO回答）」と言う質問をDEPENDENTとし、他の6種の食生活関連項目と8種の情報源およびライフステージをINDEPENDENTとして解析いたしました。YES、NO回答以外の項目は、プログラムでサブコマンドのCATEGORICALを使い、その中で対象となるものをCONTRAST(____)=INDICATOR(_)で指定しました。

注；この時、対象となる回答は、人数の多い方が好ましいようです。（プログラムのことについては、プログラム相談室の先生にご相談下さい）

4.（では、）目的と結果です。

食生活に関して、いろいろな情報源から積極的な情報の収集活動が望まれますが、どのようにすれば適切な情報が得られ、得られた知識をどのようにすれば食生活の改善へと結びつけていくことが出来るかが課題です。これからは、ゆとりある生活が望まれ、余暇活動の活発化が予測されることから、余暇を使った家族のコミュニケーションが、食生活の情報交換の場となることが望ましいと考えます。

この調査の結果から、8種類の情報源から選択された情報源の個数が、平均以上あったのは主婦、有職女子、60歳以上の高齢者でした。平均以下は有職男子と男女の学生でした。情報源として新聞や専門の本や雑誌を利用しているもの（最近の学生さんは新聞を、余り読んでいらっしやらないとか――）は、一週間の欠食回数や外食回数が少ない傾向が認められました。さらには、情報源の個数が平均以下であった有職男子や若年男女は、家事労働への参加率が世界一低いことが婦人白書（H・4）に報告されています。それに対し、情報源の個数が一番多く、情報源相互の関連が認められず独立していたのは主婦でした。主婦は、料理を自分で行うことが、食生活行為のなかで特徴的と思われます。

そこで、自分で料理を行うことが、食べ物や栄養への興味を喚起し、その情報収集活動を活発化し、食生活の乱れを改善することにつながるかどうかをロジスティック・レグレッションを用いて検討いたしました。

この時の回答人数は、料理を自分で行うは主婦の375名を含め701名、行わないでは636名です。それぞれの項目で「1」が比較対象です。（表1）

お料理を自分で行いますか？ (n=1.337)

観測値		予測値	
はい	548	はい	88
はい	165	はい	536

PERCENT CORRECT
86.16%
寄与率 81.08%
76.46%

項目	n	Odds比	SIG	95%CI LOW HIGH
情報源				
新聞	845	1.0000		
非該当	492	.7815	.1981	.537 1.138
専門の本や雑誌				
非該当	891	1.0000		
該当	446	1.3949	.0748	.967 2.012
一般の雑誌類				
非該当	812	1.0000		
該当	525	.8637	.3878	.619 1.204
テレビ・ラジオ				
非該当	599	1.0000		
該当	738	.9670	.8366	.703 1.330
市場やマーケット				
非該当	1145	1.0000		
該当	192	.9417	.8012	.590 1.503
講習会など				
非該当	1276	1.0000		
該当	61	.6847	.4094	.278 1.684
広告・パンフレット				
非該当	1173	1.0000		
該当	164	1.2197	.4403	.736 2.020
その他				
非該当	1201	1.0000		
該当	136	1.0364	.8885	.629 1.708
ライフ・スタイル				
女子学生	590	1.0000	.0000	
男子学生	79	1.9686	.9206	.517 1.814
主婦	163	1.0879	.7492	.649 1.824
主婦	375	149.4758	.0000	61.692 362.143
主婦	93	3.6778	.0000	2.132 6.346
高齢者	37	5.2674	.0002	2.169 12.792
趣味を心掛けている				
はい	591	1.0000		
はい	746	1.0160	.9220	.739 1.397
食べ物や栄養への興味				
興味がある	974	1.0000	.6987	
どちらでもない	248	.8863	.6859	.494 1.591
興味はない	115	1.0684	.8343	.575 1.986
食べ物や栄養への自己知識評価				
普通と思う	710	1.0000	.0012	
かなり多い	55	2.0836	.0140	1.160 3.742
やや多い	209	5.9426	.0011	2.043 17.291
やや少ない	250	1.9211	.0666	.956 3.859
かなり少ない	113	1.1505	.6646	.611 2.168
過去一週間の栄養・食料理の本の読書の有無				
なし	764	1.0000		
あり	573	1.6663	.0057	1.160 2.393
専門講習会への参加意識				
経験と意志なし	473	1.0000	.2095	
専門教育を受けていた・いる	146	.8332	.3378	.574 1.210
講習会へ参加	207	.9224	.7514	.560 1.520
現在・過去経験はないが参加したい	511	1.6347	.1162	.885 3.018
お料理が好きかどうか				
好きでない	510	1.0000		
好き	827	4.9073	.0000	3.391 7.100
CONSTANT				.0000

この解析結果から、自分で料理をしている人が、していない人に対し有意差の認められた項目は、情報源ではやや低い水準で、専門の本や雑誌を選択している人に。ライフステージでは、女子学生に対し主婦では149倍の確率で、有職女子では3.7倍、高齢者でも5.3倍の確率で料理を行っていました。食生活に関する項目では、「食べ物や栄養への自己知識評価」を「ふつう」と思う人に比べ「やや多い方」と思う人が5.9倍、「調査日から過去一週間に栄養や料理の本を読んだかどうか」では、読んだ人の方が1.7倍、「料理をする事が好きかどうか」では、好きな方が4.9倍の確率で料理をする人に多いことが分かりました。

このことから、自分で料理を行うかどうかは、「栄養や食べ物への興味の程度」との関連は認められませんでした。料理を自分で行うものは、行わない者より「料理が好き」、「栄養や料理に関連した本や雑誌を読む回数が多い」、そしてその結果と思われますが、「自己の知識に対する評価が高い」ことが分かりました。

今後、食生活に関する情報の収集活動を活発化し、乱れた食生活を改善へと導くには、余暇活動の一つに「家族全員での食事作り」や「お父さんの台所貸し切り日」、下宿の学生さんには「外食をしない日」などを作り、情報源数の少なかった有職男子や男女の学生の積極的な食事作りへの参加が望ましいと結論づけられました。

特に、日頃健康である人は、食生活や健康に関する情報に無関心になりがちと思われます。少しぐらいなら身体的な無理をしても、年齢の若いうちや体力のある男性では、体調を崩すこともなく過ごすことができます。そのせいでしょうか？。栄養や食事への興味も少ないのではないのでしょうか？？？

料理を自分で行うことは、コンピューターから解放されて、日頃のお仕事のストレス解消にもつながるのではないかと思います。

早速、今度の日曜日には、根気はあるが簡単にできる「あめ色に輝くふろふき大根」に挑戦されてはいかがでしょうか？？？。それを当てにビールか熱燗----というのもオツではないでしょうか？？？？。

(この結果は、日本家政学会第45回大会(1993.5.22/23)で、発表いたしました)